

まんだら通信

第202号 (通巻237号)

平成25年04月 西暦2013年 佛暦2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



お寺をもっと…

言い伝えでは、このお寺は行基菩薩さまが開かれたということになっています。行基さまは、奈良の東大寺大仏殿を造つたり、主に近畿地方で社会事業をしたり、お寺を造つたりが忙しかつたので、ご本人がここまで足を伸ばしたとは思えないのですが、そのお弟子などがおいでになつたことは充分考えられますね。

都から遠く離れたこんなところに、という考え方もありますが、旧三芳村には政府の役所『国府』がありましたし、館山の国分には『安房国分寺』がありました。都の奈良までは、直通の広い道路があり、途中には代え馬や宿泊所などを用意した『駅』も整備されていきましたから、想像以上に都は近かつたのです。

何よりの証拠に、紫雲寺には十年前に皆さまのお力によって、約五百万円かけて京都にある日本美術院の国宝修理所で、一年

がかりで修理し、この欄で紹介した『平安佛』が安置されております。

このお寺は以前、数百メートル川上の『塩寺』にありましたが、二百年前の文政初めには火災に遭いました。再建の時は、みんなでもつこを担ぎ、クワを振るい、山に入って柱や桁の材木を切り出し、屋根を葺く萱を刈って運びました。茅葺き屋根は、数年に一度は手入れをしないと雨漏りに繋がります。

つまり、千年もの長い間、大切に守り続けたお寺なのです。

これは紫雲寺に限らず、日本中のお寺がこのようにして続いてきました。

お寺に住むお坊さんはどうだったのでしょうか。村うちで、頭が良く素直な子がいるという噂があると、周囲の勧めもあつてお寺のお弟子になりました。

身内の誰かが仏門に入ることは、親類縁者の誉れでしたから、『伝兵衛方丈』、『金佐方丈』などその家の屋号で呼ばれました。明治三十七年に亡くなられた、館山市尾場、早川孫右衛門家出身の盛施さんは、『尾場方丈』と呼ばれて親しまれたそうです。

お坊さんはお葬式を頼まれることは勿論ですが、寺子屋を開いて、子供たちに読み書きそろばんを教えたり、嫁取り婿とりや名付け親をしたり、集落のめ事の相談に乗つたりと、お寺は『よろず相談所』でした。

それもこれも、長く厳しい修行に堪えて身に付けた人柄と、学識が信用されたからです。残念ながら明治以来、大方の皆さんが思うお寺は、葬式と法事だけするところになつてしまつたように見えます。

それで世間が満足に動いていないのなら、それはそれでいいのですが、例えば先月号に書いた『地域の絆のゆるみ』が、近ごろは日ごとに進んでいます。

人が住み着いて以来、異民族に支配されたことがないという、世界に一つしかない国が日本ですね。そのせいなのか、『私の利益よりもあなたの利益が先』という『思いやり』の心が身に付きました。

日本の中だけにいると、当たり前過ぎて気付かないことですが、外国人にはハッキリと見えるのです。

明治の初め来日し、東京から北海道まで召使い一人を連れて旅行した、イギリス人のイザベラ・バード女史は、『日本奥地紀行』で、この国の自然と人情の優しさを繰り返し讃えていますし、『大森貝塚』の発見者、米国人のエドワード・モース先生も日本に惚れ込み、普段の生活用品などを手当たり次第買い込んで本国に送り、立派な博物館を作りました。

数え上げればキリがありませんが、最近では、世界的な日本文学で文化勲章も受けたドナルド・キーン先生。一昨年の東北地方の大災害の惨状を見て、日本人を少しも勇気づけることができると、去年でしたか日本に帰化しました。

誰でも、生まれたままならば、一番可愛いのは自分に決っていますから、『思いやりの心』は親兄弟や周りのひとが、繰り返して見せなければ、子どもの身に付きません。

インドに、ジャータカという膨大な説話集があります。お釈迦さまが、気が遠くなるほど何回も生まれ変わりながら、他人のために自分を犠牲にするお話ですが、西部劇でも命を捨てる覚悟の友情物語ならみなが涙を流します。

大東亜戦争に敗けて以来、『個人の権利』や『個人情報』が何より大事、『人の命は地球より重い』などという身勝手な話ばかりです。

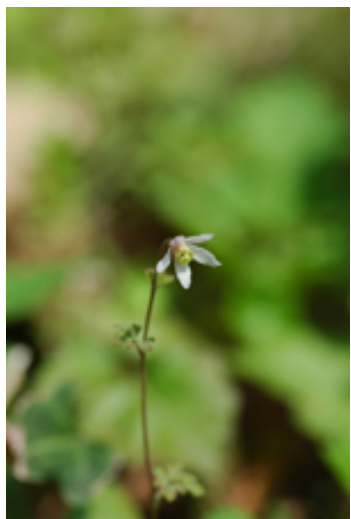
『地域の絆のゆるみ』は、一番根っこには、お節介は御免という、こうした考え方があると私は見えています。

このままで行くと、孤独死や車を使えない人の『買い物難民』が、この地域でも起きます。

市長さんや議員さん、私たち住民が知恵を絞らないと、益々住み難い南房総になつてしまいます。で、とりあえず今、すぐに実行出来ること。紫雲寺にはいつも『運手』が三人、車も三台あります。

今日は、天気がいいから海を見に行きたい。便せんがなくなつた。病院へ行きたい、ネコのエサを買ってきて、などなど。

遠くに住む人の代わりにのお墓参りなどは以前からしていますので、どんなことでも二十四時間いつでもご連絡下さい。



▼茅葺き屋根のお堂の油絵は、改築前の本堂です。亡くなった高田友安さんが奉納したもので、タテ50釐、ヨコ60釐ほど。裏にサインがあって、『紫雲寺新緑 昭和57年7月、石井博』と読めます。高田さんのお友達と聞きましたが、それ以上は残念ながら分かりません。私が大好きだった茅葺きの本堂。今になれば貴重な什物です。▼今月はヒメウス【キンポウゲ科ヒメウス属】。草丈20釐ほど。花は1釐足らず。他の草に寄りかかってうつむいて咲くので撮影に苦労します。2013.4.8 龍渉

▼繰り返し襲ってきた春の嵐に遅咲きの大島桜が大方散ってしまい、今日4月8日の花御堂は、いつもの年より心なしか淋しく見えています。午前中は、近所の皆さんが入れ替わり立ち替わりお参りに来ておしゃべりをして行きましたし、午後は『おもいやりの郷』の人たちが、リフトカーでお参りに来ました。「昔は、のり巻きやお稲荷さんを、重箱に詰めてもらって暗くなるまで遊んだねえ」と、『野駟け』の懐かしいお話が。▼今月のオープンテンプルは第3日曜日の4月21日です。

余滴

第八十七話 外国人機長

最近、外国で日本人観先客が事故に巻き込まれるというニュースが多いですね。それだけ、日本人は外国を旅行している人が多いということですが、これくらいつしやる方、くれぐれも気をつけてください。

今日は、ちよつと機長の話をさせていただきます。

つい、ひと月ほど前ですか、トルコ航空の元機長が八十七歳でお亡くなりになりました。そのことは別に珍しいことではないのですが、イスタンブールで行われたその葬儀には、日本領事館の領事をはじめ、当地に住む数多くの日本人が参列し冥福を祈ったそうでございます。

なぜ、ひとりのトルコ人機長の葬儀に日本人がこんなに集まったのでしょうか。それは、こんな理由からです。

一九八五年三月、イラン・イラク戦争が勃発しました。いまから二十八年前のことです。当時のイラクのサダム・フセイン大統領は、「いまから四十八時間後、隣国イランの領空を飛ぶ飛行機は、どこの国であれ撃ち落とす」と全世界に通告し、イランの首都テヘランの空爆を宣言したのです。

これを聞いたテヘランに住んでいる外国人たちは、大騒ぎです。本格的な戦争が始まる、こんなところにはいられないというので、あわててテヘラン空港に集まり、自国の救援機を待つて、すぐに乗り込み、イランをあとにしました。

日本人二百十五人もまた、日本からの救援機を待ちました。ところが、無情にも、日本政府から「航空機の安全の保証がないので、救援機は飛ばせない」とい

う連絡が現地に入ったのです。もちろん、定期便も就航してない時代です。

彼らは「ああ、自分たちは国から見捨てられた」と思い、政府の非情さを嘆き、空爆による死を覚悟しました。

領事館員が必死に他国に交渉しても、それぞれ自分の国の国民優先で、聞く耳も持ちません。子供も含め、日本人たちは、途方に暮れました。肩を寄せ合い、自分たちの運命を呪い、希望を捨てたその日の未明のことです。真つ暗な空から

明るいライトをつけた二機のトルコ航空の飛行機がテヘラン空港に滑り降りたのです。トルコ政府が、なんと、孤立した日本人たちを救出するために危険を冒して救援機を派遣してくれたのです。

こうして、日本人たちは無事に故国に戻れました。その時の一機の機長が亡くなられたオルファン・スヨルジュさんだったのです。日本人が葬儀に参列するのは、当然のことかもしれません。

それにしても、なぜ、トルコ政府は、危険を顧みず日本人救出のために救援機を飛ばしてくれたのでしょうか。

お話は明治時代にさかのぼります。一八九〇(明治二十三)年九月十六日、トルコ軍艦エルトゥールル号が和歌山県串本町大島沖合で、折からの台風で座礁し、転覆してしまいました。これにより乗組員六百十八人は夜の荒海に投げ出されました。

大島の人々は、その時、風雨荒れ狂う海に出て、生存者六十九名を救出、浴衣などの衣類を与え、台風で出漁できない日々が続いていたため、蓄えもなかつた自分たちの食料を差し出し、卵を得るために大事に飼っていた鶏まで供出して、献身的な救援活動を行ったのです。

翌日、島の漁師たちは県に連絡をとって、救出者を県内の病院に運びました。明治天皇は、その話を聞き、ご自分が

中心となり、多くの義損金を集め、それを彼らに託したのです。

そして、遭難して二十日目、日本海軍の軍艦で当時のオスマン帝国の首都イスタンブールまで六十九名のトルコ人たちを無事送り届けたのです。

彼らは、その後、自分たちがいかに日本人に親切にされたかを語り継いだため、その逸話がトルコ航空の救援機につながったのです。

いまでも、和歌山県串本町の町立大島小学校の子供たちは、島にある軍艦遭難慰霊碑を、地域の人たちといっしょに清掃したり、追悼式典では追悼歌を披露しているそうですよ。

また、トルコの小学校や中学校の教科書にも、この軍艦の遭難と日本人住民の救出の様子が掲載されていると聞きます。ひとりのトルコ航空元機長の葬儀には、こんな国際交流の話が隠されていたんですね。

イランのテヘラン空港で「もう、ダメだ」と思った日本人のひとりには、後に、この町立大島小学校に行つて、全校生徒の前でこうお礼を述べたそうですよ。

「みなさんのひいおじいちゃんやひいおばあちゃんたちがトルコ軍艦の乗組員の人たちを助けてくださったおかげで、トルコ政府によつて、私たち二百十五人の命が助かりました。

みなさんのご先祖のおかげです。本当にありがとうございます」

ちなみに、遭難した乗組員をイスタンブールまで届けた日本の軍艦「比叡」には、「坂の上の雲」の主人公秋山真之が幹部候補生として、乗っていたそうです。ねえ、和歌山県の皆さん、この話、和歌山では、大変に有名ですよねえ。

今月も鳳豊師匠とMOKU出版のご好意で、人情小断を転載致しました。

筆者の鳳豊師匠は、日本中を飛び回って当事者に会い、事実を聞き出して記事にするという書き方ですから説得力がありますね。

また、人情小断というほどですから、ほのぼのと暖かくて、読み終わって爽やかな気持ちになります。

ところで、日本の飛行機だけが助けに行かなかったのは、航空自衛隊の派遣には社会党などの野党が、民間の日本航空は、労働組合が反対したからだそうです。(自衛隊については、法律を変えて現在は派遣可能だそうです)

このエルトゥールル号遭難のあと、明治三十七年に起きた日露戦争で、世界中の予想に反して日本が勝利します。

長い間ロシアに痛めつけられていたトルコなど周辺の国々は、自分たちが勝つたように喜び、関係のないようなインドでさえ、毎日パレードをして喜んだそうです。

世界の中で、日本に親しみを持たない国は、三つだけと極く僅かですが、特にトルコは親日国といつて良いと思います。

平成十一年八月、トルコ北西部大地震が起き、一万七千人以上の犠牲者を出した時、自衛艦おおすみ、ぶんご、はやせが仮設住宅五百戸分を届け、十月には民間の商船で更に五百戸を届けたということです。

『あそか基金』へご寄付、有難うございます。

佐原・惣持院様 東京・高橋正夫様 土屋茂夫様 加藤みつ子様 館山・長谷川かずえ様 甲府・曾雌芳典様 鋸南町・妙典寺様 『まんたら通信』へ

白浜・早川文枝様 林恵子様 横須賀・鈴木世津子様 千倉・海雲寺様 浅沼洋一郎様 長性寺様 鴨川・笹元様 酒々井町・平田様 匿名の皆さまや、絵手紙や葉書、メールや電話での感想や切手などで励まして戴いて恐縮しております。

アンギーお坊さまが来日中ですので、後日お渡します。